

[A] 7 世紀の東アジア(概説)ーテキスト P15 対応ー

7 世紀～10 世紀の東アジアとの外交は、日中・日朝関係史としてテーマ型に問われることがある。ただし、7 世紀の外交については、[授業解説(飛鳥時代)]でも既に説明しているので、新羅の朝鮮半島統一(676)までを簡単に概説した上で、8 世紀以降の東アジア外交を説明していこう(テキスト P9 の東アジア外交で既に説明しているので、学習が済んでいる場合、[A]は飛ばしてよい)。

618 年に高句麗遠征に 3 度も失敗した隋が滅亡すると、中央集権体制を整え、長安を都とした圧倒的な強国の唐が建国された。隋に対して対等外交を要求した倭も、強大な唐を目の前にしては、さすがに皇帝に臣下の礼をとる朝貢形式をとらないとぶっ飛ばされる。そのため、**630 年**には大上御田鍬(614 年に第 4 回遣隋使として渡航した人物)が最初の遣唐使として派遣されたんだ。

なお、遣唐使は 894 年に菅原道真の建議で停止されるまで 10 数回派遣されているんだけど、その目的は(1)唐の先進的な文物・制度の輸入・(2)日本の国際的地位の向上の 2 つ。(1)の中国の進んだ文物や制度をゲットすることに関しては問題ないと思うんだけど(小学生の頃に学習したでしょ?)、(2)日本の国際的地位の向上とは何なんだろう？

唐に朝貢する際には、元旦の 1 月 1 日に唐の皇帝に周辺諸国が挨拶をする。現在で例えるならば、世界の大国であるアメリカのもとに、日本・韓国・カナダ・イギリス・オーストラリアなどの同盟国が、1 月 1 日に挨拶しに行くと思ってくれるとよい(実際はそんなことないけど)。その席ではアメリカが「Happy New Year!」って高いテンションで挨拶をして、他の国も挨拶するんだけど、上座にはアメリカが座っている。そして、アメリカが同盟国の重要性の順に席を割り振っていくんだけど、その順番が「カナダ・イギリス・オーストラリア・韓国・日本」などの順だったら、どう思う？

「ちょい待てや!!何で日本がこんな下やねん!!どう考えても韓国よりは日本の方が上やろ!!」って思うでしょ？(世界レベルで考えるとカナダ・イギリスより日本の重要性は劣るが、東アジア外交においては日本が最重要だと思う。あくまでも個人的意見なので悪しからず)。

上記したものは架空のものだけど、唐と周辺諸国でもこうした関係がある。つまり、元旦に挨拶をする時に、唐が割り振る席次は、他の国の序列にあたるわけだ。そして、これと同じようなことが 753 年の唐の朝賀の際しても起きている。その席上では、唐がもちろん上座にあたる席に座って、その後の席次は「新羅・日本…」と、新羅の方が上位とされていたんだ。これに遣唐副使の大伴古麻呂が「ちょい待てや!!」ってブチ切れ。そして、彼の必死の抗議によって、席次は「日本・新羅…」と改められたんだ。

「小ささ…」って思ったかもしれないけど、外交においては意外に大切なこと。この時代の中心は、誰がなんと言おうと中国。その中国によって日本は新羅よりも下位とみなされれば、日本は新羅に対しても強く発言することが難しくなってしまう。だから、「中国に認められること＝日本の国際的地位」につながる。ゆえに、目的の(2)として日本の国際的地位の向上があるわけだ。

さて、その唐は中華思想(華夷思想)に基づいて、周辺諸国に朝貢を促したけど、高句麗だけは唐に服従しなかった。そして、これに怒りを覚えた唐は、その強大な軍勢力をもって、高句麗への遠征を計画した。一方、ビビりまくっていたのが高句麗と百済で、両国ではそれぞれ 642 年にクーデターが起きて、中央集権体制へと一挙に向かっていったわけだ。

クーデターによって権力を集中させた百済・高句麗は、同じような国同士で同盟を結び、新羅を挟み撃ちにしようとした。中央集権体制を早くに導入していた新羅も、さすがに挟み撃ちにされたら国家存亡の危機だ。そこで、背に腹は変えられないって感じで唐と同盟を組む。こうして、東アジアでは唐・新羅 VS 百済・高句麗という関係が出来上がり、644 年から唐が高句麗への侵攻を開始し、新羅は百済との戦いに集中するわけだ。

でも、騎馬民族として名高い高句麗は手ごわい。さすがの唐も高句麗征伐は困難を極め、ここで急に方向転換を図る。それが、660年からの百済への侵攻で、水上から唐が、陸上から新羅がそれぞれ百済を挟み撃ちにすることで、百済の滅亡を優先事項にしたわけだ。こうして 660年に百済は唐・新羅の連合軍によって滅亡してしまった。

ただし、百済の滅亡とはいっても、あくまでも都の泗水城(扶余)が陥落し、王の義慈王が捕まったにすぎず、百済の家臣たちはまだ抗戦を続けている。そこで、日本は鬼室福信(百済の遺臣)の要請に応じて、百済を再興させるために朝鮮半島に出兵することになった。それが 663年の白村江の戦いになるわけだけど、結果は唐・新羅の連合軍にチンチンにされる大惨敗だったね。

百済を滅ぼし、倭の軍勢も撃退した唐・新羅の連合軍は、次のターゲット高句麗征伐に移行する。こうして 668年に高句麗は滅亡することになるんだけど、そののち唐と新羅のどちらが朝鮮半島を支配するかという問題が生じるようになった。もともとこの2国は、百済・高句麗の連合軍に対抗するために手を組んだんだよね？だから、百済・高句麗が滅んだ今は、どちらが朝鮮半島の覇権を握るかで対立していくわけだ。

こうして、新羅は唐との一騎打ちに臨むことになったわけだけど、日本という厄介な存在がいた。もしも、日本が唐と手を組んで攻め込んできたら、新羅だってイチコロだから、日本だけは絶対に敵に回してはならない。そこで、668年に新羅使という使節を日本に派遣してきたんだ。

新羅使「…あ、あの〜〜。す、すいませ〜ん。」

日本「おうおう、これはこれは。ウチと仲良かった百済を滅ぼした新羅さんじゃないすか！」

新羅使「…あ、あのう、ちょっとお話が…。」

日本「はて、何のお話ですかね!？」

新羅使「え、え〜と、言いづらいんですけど…。僕らこれから唐と戦わなくちゃいけなくてですね…、そこで日本さんと仲良くしておきたいなあ…って。」

日本「はあ!?…こりゃ、またずいぶんムシの良い話ですな〜。」

新羅使「わかっちゃります、わかっちゃります!!重々、承知の上でございます。」

日本「ほお。」

新羅使「そこです、新羅が日本に服属・朝貢する形で同盟を結んでほしいんですよ。」

日本「……!!」

新羅「新羅は日本の服属下に入る。さらに、我々はすでに唐から律令制度などの制度を学んでいますので、そういった制度や文化などは全て日本にお伝えしますよ？どうでやんすか？」

日本「…え、ええやないかい。」

こうして、新羅が日本に朝貢する形で、新羅は日本と通交を結ぶことになり、唐との戦いに集中することになる。そして、唐の勢力を朝鮮半島から追い払った新羅が676年に朝鮮半島を統一することになるんだ。

一方、日本は新羅を介して唐の制度・文化などを学んでいくになるので、これ以降たびたび遣唐使ならぬ、遣新羅使という使節を派遣することになる(日本からの遣新羅使は27回派遣され、新羅からの新羅使は47回来日している)。こうした新羅と仲良くしている時期に、遣唐使を派遣するのはさすがに難しいよね。ゆえに、天武天皇・持統天皇時には遣唐使の派遣は行われていないんだ。

[B] 8世紀の東アジア―テキスト P15 対応―

676年に朝鮮半島を統一した新羅は、そののち国力を充実させていって、唐との関係も修復していく(旧高句麗の領地をそれぞれ唐と新羅が分割することで和睦が成立した)。そして、8世紀になるとまた新羅使を派遣してきたんだ。

新羅使「おい。話がある。」

日 本「おつ、なんだなんだ。これは我が日本に服属している新羅じゃねえか(なんだ、今回はやたら態度がでけえな、こら)。」

新羅使「今まで〜、日本に朝貢する形とってたんすけど〜、もう正直日本に朝貢している意味なくなってきたんすよね〜。」

日 本「はあ!?!」

新羅使「だから〜、もう対等な関係でいいっしょ!?!」

日 本「て、てめえ…!!自分がピンチな時には、あれだけへいこらしておいて、それがなくなった途端に対等だと!?!?!」

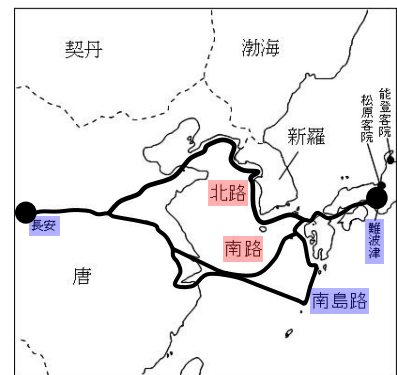
新羅使「ということで〜、以後は対等な関係でよろしくっす。」

…これは、キレてもいいと思うよ。まあ、教科書チックにいうと、「国力を充実させた新羅が対等な立場を主張し、日本が従属国として扱おうとしたため」、新羅との関係が悪化するんだけど、日本では不義理な新羅に対する反発が強まるんだ。そして、中国で755〜763年に安祿山・史思明の乱(安史の乱)が起これと、それに乗じて新羅を征伐しようという計画が藤原仲麻呂によって759年に持ち上がるんだ(のちに藤原仲麻呂が失脚したことで実現はされなかった)。

そして、8世紀になるとこうした新羅との関係悪化によって、遣唐使の航路も変更せざるを得なくなる。今までの遣唐使は、難波津から出発して(遣唐使船が出港する港として重要であったため摂津職がその管理にあたっていたよね)、朝鮮半島を經由して唐の都の長安に赴く北路と呼ばれる航路がとられていた。

でも、新羅との関係悪化によって、8世紀以降は沖縄から南西諸島沿いに北上していく南島路や(南東路ではない)、五島列島から東シナ海を横断していく南路をとらなきゃいけないんだ。これは夏〜秋に出発するので、台風巻き込まれる可能性の高い危険な航路になる。なお、台風の時に行かなきゃいいじゃんって思った人もいるだろうけど、それは無理。遣唐使は遣唐使の滞在費は唐側が負担する(日明貿易などの際も同じ)。

だから、負担費用を増大させるわけにもいかないの、元日の朝賀に間に合わせるためには、危険がいっぱいな夏から秋にかけて出港しなくちゃいけなかったんだ。



[遣唐使の航路]

このように、遣唐使の航路は、もともとは安全な北路がとられていたけど、新羅との関係悪化が背景で、のちに危険な南島路、さらに南路へと変更された。そのため、はじめは2隻だった遣唐使船も、8世紀以降は通称「よつのふね」と呼ばれる4隻に500名ほどが分乗していくようになるんだ(遣唐使船は遭難してしまう場合が多かったので隻数を増やした)。なお、630年〜894年の間で遣唐使が任命された回数は19回、実際に渡航した回数は15回とテキストに記しているけど、余裕があったら覚えておくとよい。本当は、数え方の違いがあるので、20回任命・16回派遣という学説と、18回任命・14回派遣という学説もあるので、入試問題で出題するべきではないんだけどね(早○田大学・上○大学で出題済み)。

さて、その遣唐使といえば、天武天皇・持統天皇時にあたる669年から701年には遣唐使の派遣は行われていなかったけど、702年に遣唐使は再開されることになる。これは前年の701年に大宝律令が完成したことが背景にあるんだ。

日本の律令制度は、唐の律令制度を参考にしてつくられたものだけど、新羅のように丸パクリしたものではなく、日本の実情に応じて改めたところがある。だから、日本としては、「新羅と違って、日本はちゃんと律令制度を自ら整えたんですよ!!」と唐に報告したかったんだろうね。

そのため、702 年の遣唐使では、大宝律令の編纂にも参加した粟田真人^{あしだのまひと}が遣唐大使として派遣され、さらには『貧窮問答歌』で有名な歌人の山上憶良^{やまのうえのおくろう}なども乗船していたんだ。また、この遣唐使再開の際には、「倭」→「日本」を国号としたことを唐に報告している。それだけ、律令制度を自ら整えた国家に成長したんだという自負があったんだろうね。

これ以降、遣唐使船は 702 年→717 年→733 年→746 年(停止)→752 年と、約 20 年ごとに派遣されている。その遣唐使の中で、とりわけ多くの有名人が渡航したのが 717 年の遣唐使。奈良時代に藤原四子の一人として登場した藤原宇合^{ふじわらのうまかい}(藤原不比等の子で式家の祖)が遣唐副使として乗船していたし、玄昉^{げんぽう}(僧侶)・吉備真備^{きびのまきひ}(吉備地方の豪族出身)もこの時に乗船していて、2 人は 735 年に帰国した後に橘 諸兄^{たちばなのもろえ}政権を補佐することになる。なお、その後に藤原仲麻呂が台頭してくると、玄昉は筑紫観世音寺に左遷され、吉備真備も左遷されて 752 年の遣唐使で再び唐に渡ることになる。そして、帰国後は道鏡政権下で右大臣にまで登り詰めることになるんだ(吉備真備を記述で問う際には、「2 度入唐し、のちに右大臣となった」というキーワードで特定してくる)。

ただ、2 度も入唐して帰国することができた吉備真備は運が良かった方かもしれない。中には、唐に渡ったものの、帰国できずに唐で客死した人物もいる(他国で死ぬことを客死という)。その代表的な人物が阿倍仲麻呂^{あべのなかつまろ}だ(古代の「あべ」は、阿倍内麻呂・阿倍比羅夫・阿倍仲麻呂など「阿倍」が多い)。阿倍仲麻呂は、唐の 9 代皇帝玄宗^{げんそう}に重用されて、朝衡^{あさこう}という唐名で 50 年以上も唐朝に仕えた文人(玄宗は楊貴妃を寵愛して、安史の乱(755~763)の原因をつくったことでも知られる)。あまりにも優秀だったため、仲麻呂が「日本に帰りたい！」って言っても、玄宗が帰してくれなかったり、唐の有名な詩人の李白^{りはく}・王維^{わうい}らとも交友があったりしたことでも知られているね。

そんな仲麻呂も、752 年に藤原清河^{ふじわらのきよか}(藤原房前の子)を遣唐大使とする一行が唐にやってくると、ようやく日本に帰ることを許されることになるんだ。そして、帰国する際の送別会で仲麻呂が詠んだものが、百人一首でも有名な以下の歌だ。

「天の原 振りさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」

(口語訳：天を仰いでではるか遠くを見渡せば、月が昇っている。

あの月は私の故郷の奈良の春日にある三笠山に昇っている月と同じなのだなあ)

この和歌からもわかるように、よっぽど日本に帰れるのが嬉しかったんだろうね。そして、「よつのふね」と呼ばれた 4 隻のうち、藤原清河らと共に第 1 船に乗るんだけど、暴風雨に巻き込まれて船が難破してしまう(この時の第 2 船には鑑真が乗っていて、第 2 船は無事日本に到着することに成功している。第 1 船~第 4 船のどの船に乗るかで運命が変わってしまったわけだ)。結局、長安に戻ることで、阿倍仲麻呂も藤原清河も、日本には帰れず唐で客死することになるんだ。

なお、717 年に渡唐した中には井真成^{いさなり}という人物もいる。彼も、若くして亡くなったため日本に帰国できなかった人なんだけど、2004 年に中国西安で発見された彼の墓誌が話題になったので、余裕があったら押さえておくといいね。

[C] 9 世紀の東アジアテキスト P15 対応ー

遣唐使は 9 世紀になっても派遣されていて、804 年に派遣された平安時代最初の遣唐使では、橘 逸勢^{たちばなのはや}(842 年の承和の変で伊豆国に配流)・最澄^{さいしょう}(805 年に帰国して天台宗を開いた僧侶)・空海^{くうかい}(806 年に帰国して真言宗を開いた僧侶)なども渡航している。そして、838 年に派遣された遣唐使では最澄の弟子の円仁^{えんにん}(渡航日記として『入唐求法巡礼行記』を記す)・円珍^{えんしん}(渡航日記として『行歷記』を記す)も唐に渡っているんだけど、この際に遣唐副使に任命された小野篁^{おののちかむら}は乗船を病氣と偽って拒否したため隠岐に配流されている。まあ、上記のように遣唐使は危険性が高いし、有能な自分が死ぬ可能性のある旅になんて出たくないって気持ちはわかるよね。

ただし、この838年の遣唐使は実質的に最後の遣唐使になる。なぜかという、宇多天皇時の894年に、遣唐大使に任命された菅原道真の建議で遣唐使は停止されているから。じゃあ、何で菅原道真は遣唐使の廃止を提案したんだろう？その理由はいくつもあるんだけど、代表的なものとしては以下の5つが挙げられる。

- (1) 唐の衰退(755年～763年の安史の乱(安禄山・史思明の乱)以降の唐は衰退し、875年には黄巢の乱が起きた。これは鎮定されたが最終的に907年に唐は滅亡した)
- (2) 航路の危険性(当時は新羅との関係悪化のため、危険な航路である南路をとっていた)
- (3) 新羅の海賊の活動(関係が悪化した新羅の命令で、新羅の海賊が対馬・北九州を襲っていた)
- (4) 派遣費用調達の困難(朝廷の財政難により、遣唐使派遣の費用の調達が困難だった)
- (5) 唐の民間商船の頻繁な来航(今までは遣唐使のもと中国の珍しい陶磁器や書籍などの唐物を輸入していたが、この頃には唐の民間商人が大宰府(博多津)などに頻繁に来航していたため、遣唐使のような公的な交渉を続ける必要性がなくなった)

つまり、「当時の航路が南路という危険な航路で唐に行くのは危ないし、最近では唐の民間商人が大宰府(博多)にやって来るし、その肝心の唐は衰退していて、いずれは滅亡するだろうから、遣唐使はもはや必要ないよ」ということ。この道真の建議を受けて、宇多天皇は894年に遣唐使の廃止を決定することにしたんだ。

＜遣唐使廃止の覚え方＞

「吐くよゲロゲロ遣唐使」

→吐(8)く(9)よ(4)

㊦ 遣唐使の廃止『菅家文草』by 菅原道真

諸公卿をして遣唐使の進止を議定せしめむことを謂ふの状。

右、臣某、謹みて在唐の僧中瓊、去年三月商客王訥等に附して到る所の記録を案ずるに、大唐の凋弊、之を載すこと具なり。……臣等状して願はくは、中瓊の記録の状を以て、遍く公卿・博士に下し、詳らかに其の可否を定められむことを。国の大事にして、独り身のためにあらず。且く款誠を陳べ、伏して処分を請ふ。謹みて言す。

寛平六年九月十四日、大使参議勘解由次官従四位下兼守左大弁行式部権大輔春宮亮 菅原朝臣某 (諸公卿に遣唐使派遣の是非を審議していただくことを申請する上書)

私(菅原道真)が中国の中瓊が去年(893年)王訥に通じて送ってきた記録を見てみると、唐の衰退が詳細に記録されており。…(中略)…そこで、詳細に検討し派遣の是非をお願いいたします。

寛平6年(894年)9月14日、大使(遣唐大使)菅原道真

こうして、遣唐使が廃止された後は、日本人が海外に渡航することは原則として禁止された。ただし、僧侶が修行のために渡航する場合は許可制で認められたので、右の3人のように、許可をもらった上で宋に渡った僧侶もいるんだ。裔然は早稲田・明治・青山学院大で、成尋は早稲田・学習院大で出題されたことがあるけど(寂照は選択肢にあるだけで出題はされない)、基本的に選択問題だし、ほとんど出題されないの、暇だったら覚えるぐらいでいいけどね。

また、よく遣唐使が廃止されたことで中国との関係が途絶えたと思っている人がいるけど、それは間違い。遣唐使廃止の理由(5)にもあったように、この頃には唐・新羅の民間商船が大宰府(博多津)に頻繁に来航するようになっていたから、遣唐使廃止後も中国の文物は流入することになる。そして、唐などの外国使節を迎えるための施設として平安京・大宰府(博多津)に鴻臚館が設けられたんだ。

＜入宋した僧侶＞

裔然(983年に入宋した東大寺の僧侶)

→宋版大藏經・釈迦像を持ち帰り、

持ち帰った清涼寺所蔵の釈迦像の

胎内から多数の納入を発見(1954)

寂照(1003年に入宋した天台宗の僧侶)

→「天台宗疑問」の答釈を得るが客死

成尋(1072年に入宋した天台宗の僧侶)

→多くの經典を日本に送るが客死

鴻臚

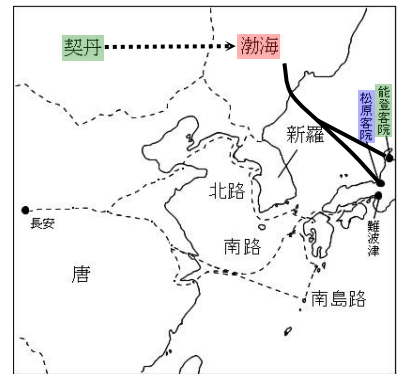
なお、菅原道真が唐の衰退を指摘していたように、その予想は見事的中することになる。遣唐使が廃止された 894 年から、不吉な数字の「13 年」後の **907 年**に唐は滅亡しているんだ(欧米では「13」は不吉な数字とされている)。そして、五代十国の混乱を経て **960 年**には宋が建国される(960 年に開封を首都として建国された宋を「北宋」と呼び、1127 年に女真族が建国した「金(1115～1234)」に領土の北半分を奪われ、南方の杭州に遷都して以降の宋を「南宋」と呼ぶ)。

[D] 10 世紀の東アジア—テキスト P15 対応—

668 年に唐・新羅の連合軍によって高句麗が滅ぼされると、高句麗の遺民たちは北方に逃れて、698 年に沿海州のツングース系民族の靺鞨族と渤海を建国することになる(渤海の「渤」は非常に間違えやすい。「李」は上下が繋がっているので注意)。当然、唐・新羅に滅ぼされた高句麗の人々が建国した国だから、当初は唐・新羅とは対抗関係にある。そのため、新羅を牽制するためにも日本との通交を求めてきたんだ。

それが、渤海が日本に派遣した渤海使というもの。**727 年**に初めて渤海使が来日して以降(計 34 回来日)、日本からも遣渤海使がたびたび派遣されて(計 13 回派遣)、渤海の宮都跡か日本の和同開珎が発見されるなど、盛んに貿易が行われていたんだ。そして、その渤海使は、右のようなルートで来日してくる。そのため、越前国の敦賀津に松原客院、能登国の福浦津に能登客院といった渤海使の滞在施設が設けられたんだ。

さて、その後の渤海は、積極的に唐に遣使して関係修復に努め、唐から渤海国王に冊封されるなど、唐からも「国家」として正式に承認されることになる。そして、9 世紀には「海東の盛国」といわれるまでに繁栄するんだけど、既述したように 10 世紀の初め、907 年に唐が滅亡してしまったよね。



〔渤海使の航路〕

今までは唐の周辺諸国である渤海、さらには新羅も、唐から冊封を受けることで、国内支配を安定させていた。でも、その中心である唐が滅亡してしまったら、周辺諸国は大混乱だ。その結果、中国と敵対していた西方に位置するモンゴル系民族の契丹族が勢力を拡大していき(契丹族は 916 年に建国した国を遼という)、その契丹族によって、**926 年**に渤海は滅ぼされてしまったんだ(なお、その遼も 1125 年にはツングース系民族の女真族が建てた金によって滅ぼされている)。

同じように、唐の滅亡によって求心力を失い、死に体(レームダック)と化していたのが朝鮮半島の新羅だ。そして、その朝鮮半島で、高句麗王族の子孫といわれる王建によって 918 年に高麗が建国される(高句麗を継承するという意味で国号を高麗と定める)、その高麗によって新羅も 935 年に滅亡しているんだ。

—<唐の滅亡(907)の影響>—

- ① 契丹族(モンゴル系民族)が 916 年に建国した遼によって、渤海が滅ぼされる(926)
- ② 王建(高句麗王族の子孫)が 918 年に建国した高麗によって、新羅が滅ぼされる(935)

そして、最後に。日本とこれらの国々との間では、国交・貿易があったかという正誤問題で出題されるのでまとめておこう。日本と国交があった国とは、遣唐使・遣新羅使・遣渤海使などが派遣されたように、唐・新羅・渤海のみで、これらの国とは国交・貿易ともに行われていた(唐とは 894 年の遣唐使廃止以降、新羅とは 8 世紀の断交以降、民間商船の往来による私貿易が行われる)。一方で、それ以外の宋・高麗などとは正式な国交は結んでいないけど、民間商船の往来による私貿易が行われていたんだ。